

やまう、きらくしけんもとをしはからる、などよ、

〔源氏物語三十八院もあなたに出給とて、宮のおはしますにしのひさしに、のぞき給へれば略
ひとりどもあまたして、けふたきまであふぎちらせば、さしより給ひて、そらにたくはいづくの
煙ぞと思わかれぬこそよけれ、富士のみねよりもげにくゆりみち出たるは、ほいなきわざなり、
からせちのをりは、大方のなりをまづめて、のどかにも、心もき、わくべきことなれば、は、
かりなききぬの音なひ、人のけはひまづめてなんよかるべきなど、例の物ふか、らぬわか人ど
もの用意をしへ給、

〔後伏見院宸翰薫物方薫物焼様事〕

薫物たく事は、なべていかなる者も、故實をならひつたへねども、する事なれば、安き事にこそと
は覺えたれども、よくく心得てすべき事なり、あしくたきつれば、香もあしくなりて、とまらざ
るのみにあらず、不吉のかたもある也、相生の様はぬるくしてこがるべからず、火はやくて急に
こがる、を、さうこくのかともいふべし、不吉にも通へり、能心にいれておもひとけば、天然の道
理何事にも心得らる、事也、先かたきのすみを能々つくりて、よくおこしとをして、ひとりの
いをもまづあた、めて、このつくりすみの火をうづむべし、うへにもあつき炭を持て、よきほど
におほひて、うづみおほせてのち、うへをきとさぐるに、いたくあつからぬ程に、ぬるくとうづ
みて、其上に又火を置て、まばしあた、めて、たかんとする時、上の火をとり捨て、薫物を置べし、火
のぬるくて久敷くゆるがよきなり、扱すこしふすぼりくさくなるまで、やはらかに久しくたき
とをして、まばし時刻を經でけるべし、薫物のたいなるをとりはなつ事、風のふくとをりあり、か
くさきもの、かやうのふさはぬときにとりきるべからずといへり、只今又いそぎてきるべき事
のあらんには、火をいたくぬるからでたく、まばしたくべし、ふすばる程迄はたくべからず、まば